



## 75周年によぎる感懐

名誉会長 小野 哲

さて1945年の春、当時私は機関整備兵。濃紺上下のツナギ整備服の丸腰。南京城壁西側中山陵眼下の城門内側の飛行場で修理機の巡回点検が任務。更に城内住民地区に分散するバッテリー工場・計器工場と機材倉庫の巡察も。

城壁内側の間道で出会う住民は老人と幼少ばかり。その老人達は親しげに、「シーさん、お茶」巡察の分隊まで仲間の如くに。

揚子江北岸には毛沢系の物騒で狂暴の軍隊。空から見えない。南西には蒋介石軍の面妖な軍勢、これは聞いた話。城内飛行場の城壁内側の住民は日本兵を安全な仲間と見る。

揚子江北岸の諸外人は雑多で、永住の宣教師もゴッチャに悪辣外人あつかいと聞く。戦後來日した女傑写真家もいたらしい。同類の日本報道陣も嫌悪され、8月終戦を待たずに連中は不思議なすばやさで退去した。その行き先は知らない。

私は南京での日本奪還に加担する。この騒ぎは9月に本土から宮様参謀が飛来して「お上の御迷惑やめて」でチョン。お陰で南京周辺の残留部隊の帰還もあとまわしになる。翌年1月にヤット鹿兒島へ、桜島の噴煙下に帰還。軍人から民間への心情切り替は難儀。同志社の学生にもどる決心も容易でない。

政治学科の学部二年に復学するのに更に二ヶ月。戦後の日常への自由演習に模型飛行機の製作を選んだのは、日本の空を封じたGHQへの抵抗でもあった。『国際ウェークフィールド日本選手権』獲得まで七年。「封空」期間を越える。

私はこのパフォーマンスに満足した。舞い上がった私の自慢話は法律政治の先生方のヒンシュクを買う。

「国際級自由形日本選手権」でナンダ、安保反

対らしいが。他学部の年配もウワサを聞いて私の奇行にアキレ気味。それでも欧米の空のスポーツの流行を既にご存知の木枝先生は同志社航空部部長の後任に私を指名なさる。

学長の木枝先生は翼型と層流のパフォーマンスをお持ちであった。このことは翔友50の巻頭12頁に明らか。

平和憲法の教授の反応は微妙であった。私は猛烈なGHQごらい。アメリカ流の平和主義も押しつけ憲法も好まない。安保反対で赤旗も振るが。モデラーとしては「禁空」のハナをあかしたい。

全く奇妙な奴と先生は思われた、らしい。飛行機は自由のシンボルとか戦争犠牲者への鎮魂などとヌカシおる。ピカソは鳩を墜落させる逆説家で、北鮮も鳩で平和をオチョクル。「平和」の特急も戴けない。先生こんな平和お好きですか。先生はシブイお顔で無言。

以下は政治学国家学風な蛇足。

〈その1〉終戦は原爆二発を喰った日本の悲鳴で和平回復の宣言です。日本軍は自己解体を遂げ敗北降参します。古語なら降伏で、爾後、軍は兵が語れないし語りもしません。

〈その2〉終戦で「逃げを打つ」という皮肉や非難からも逃げ切れません。それ故に敢えて敗戦を「解放」に短絡させ戦時の一切を湮滅し「平和国家」が気取られます…。

〈その3〉終戦の詔勅は原爆への抗議であり、敗戦は「終戦」の結果であり対策です。米軍米兵連合軍への直結した降伏ではありません。おわかりか。日本は自らに敗れたのです。三発目を拒絶するために自滅しました。

引揚げは敗戦の結果ですが「終戦」が起点。負けたから帰れたのではなく「終戦」だからお帰り

なさいなのだ。これはタシカに判りにくい。

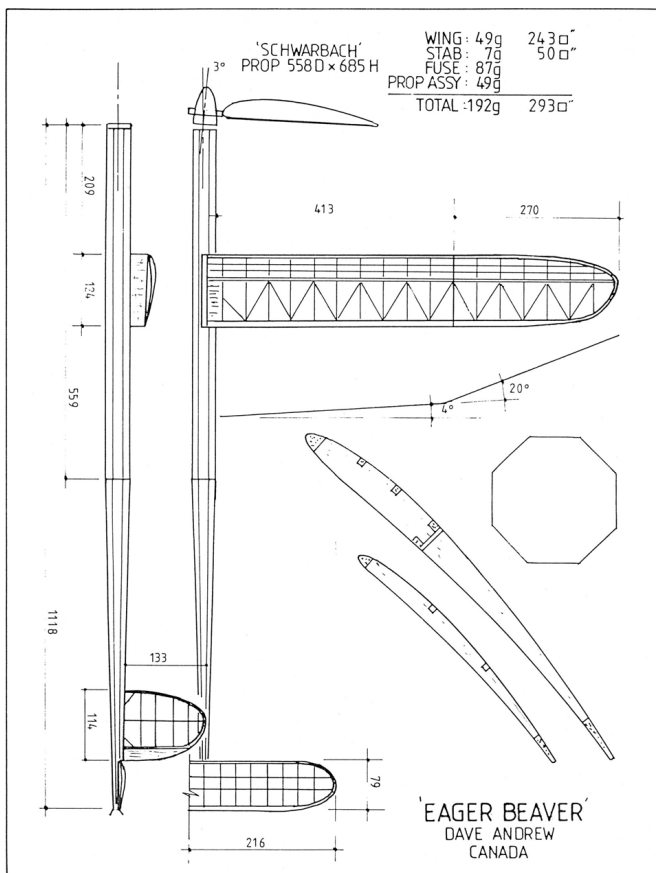
こういう次第でワカリマセンは戦後のシラケ年代の愛用語になりました。終戦を安直な逃避語に使い、日本人が日本を軽蔑する便報に仕立てるとは。

〈その4〉GHQが戦前戦中の日本諸行をボロカスに非難する由縁がおわかりか。ワカリマセ〜ン。

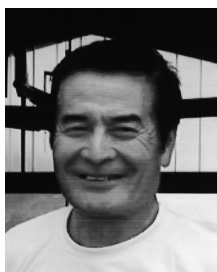
その率直さはよろしいが戦後の日本の若者の自己否定は占領軍の思うツボですぞ。

であるからして《シラケルナ》は翔友の合言葉になります。シラケタ奴に曳航索を託せますか。それは考えられませぬ。

以上で翔友の長老の説教を収納庫に入れます。



代表的なウエークフィールド機



## 祝 辞 創部75周年を祝して

立命館大学航空部監督 富 山 晋

創部75周年おめでとうございます。

司馬遼太郎さんの「明治という国家」という本の中に新島襄先生がアメリカに10年滞在新大立学設立のため寄付を募り、明治21年に同志社大学設立趣意書を出されて大学を設立され、そして立命館は西園寺公望公が私学立命館を設立されたのが明治2年という記述があります。京都という都で長い年月を経ていまだにライバルとして競い合う相手がいることに感謝せずにはおられません。

昭和39年に航空部に入学しいまだに飛んでいる私が今までに出合った同志社の航空部方々について話そうと思います。私が入部した頃は、関西は同志社の天下で、各大学は特に立命は同志社に追いつき追い越せと日夜努力したものでした。うれしいことに最近の航空部のご活躍はあの頃の強い同志社が復活しつつあるように思えます。

**牧野伊兵衛さん** 訓練部長として当時は八尾訓練所におられ、中研でお世話になり、また私が関東で50kmを飛んだ折、銀章の申請にご尽力いただき感謝しています。

**牧野鐵五郎さん** 委員長であった頃、朝日の大阪事務所にて御指導頂きました。「かみそり」とその技量を恐れられたそうですが、残念なことに私は同乗教育を受けておりません。

**北尾直敬さん** 私の事実上のお師匠はんで、初ソロなど大変可愛がっていただきました。

**向井清人さん** 飛行を再開されてから数々の記録も取られその活躍に感嘆しております。

**窪田昌三さん** 卒業してから関西エアロで色々と教わりました。グライダーに関して窪田さんの言われることに間違いはありません。その判断力を常に尊敬しています。

**石元勲さん** 今も関西エアロで一緒に飛んでいる

先輩でクラブの重鎮的存在です。ナロマインに10年以上通い、お互いダイヤの距離飛行を成功したのは良い思い出です。しかも一発で獲得された飛行センスに感心しています。

**玉井利宏さん** 以前八尾空港でモグラのクラブを作ったときの会員で、またMSDOSの時代からのパソコンの師匠で今も鶴橋の事務所に伺いピアノを聞かせてもらっています。

**川上哲也さん** 関西エアロの会員でしたが最近三重の方で飛んでおられるそうです。

**田地川、岩崎、田中、山田さん** 私が入部時の3回生で中研にて同志社の最強のメンバーと恐れられた方々で立命の努力目標でした。

**河盛さん** 同じく関西エアロのメンバーでナロマインでも一緒に飛びました。

**竹鼻、阿部、住友、山田、佐藤、鬼頭、赤見、北村さん** 同期で大いに青春を楽しんだ仲間ですが全員上手かったのに誰も教官にならなかったのは残念であり不思議です。

**箕浦健二さん** 何度か教官として合宿でお会いしました。

**野崎純一さん** 関西エアロの会員でモグラの資格を取得され現在は幹事長として頑張っています。

**吉岡名保江さん** 関学の林君とともにナロマインに同行し、石元さんらと指導して見事銀章を獲得されました。現在は滑空協会やSATAなどで滑空界のため尽力されており頭が下がります。その活躍、知名度は全国区でしょう。

同志社大学体育会航空部の皆様、これからも関西の雄として益々ご活躍ご発展されますようお祈り申し上げます。



祝 辞

## 75周年おめでとうございます

関西学院大学航空部監督 西 田 利 博

卒業して約40年経ちますが、航空部現役時代の、合宿に次ぐ合宿で青空を見ながら過ごした日々は、私の青春時代の中でも今なお輝いております。現在の現役諸君と同様に、我々の時も、飛行回数を稼ぐ為に、他大学の訓練合宿に潜り込ませて頂きました。それだけでなく、他大学の機体、牽引車、自動車曳航用の曳航車、諸機材を相互借用して、助け合った記憶があります。

現役当時は、ライバルとして他大学の航空部を見ていましたが、卒業後は、同じ滑走路で、同じ機体に乗った「空の仲間」であると、常に懐かしく思い出すようになりました。

我々の学生時代から現在に至るまで、日本学生航空連盟関西支部は、何代にも渡って教官を輩出してきた同志社大学抜きでは語る事ができません。

私の現役時代には、直接後席で教えていただいた教官としては北尾直敬教官がおられました。独特の風貌の北尾教官は、当時現役訓練生であった我々には近寄り難い雰囲気をお持ちで、訓練中はいつ雷を落とされるかとびくびくしておりましたが、お酒がお好きで、お酒が入るといつもにこにこしておられたのを昨日のこのように思い出します。

その上の大教官としては、牧野教官がおられました。直接教えていただいたことは有りませんでした。学生航空連盟関西支部で、飛ばす場所が無くなりつつあった当時、滑空場を探しに有田川や加古川と一緒に見に行ったことが懐かしく思い出されます。

又、現在の学連訓練部長の田口 昇学連訓練部長には、現役のみならず、我々 OB の遊覧飛行の

際も大変お世話になっております。

このように、関西学生グライダー界を語る上で、同志社大学の存在は、非常に輝かしいものであります。

さて此処で紙面をお借りして、日本学生航空連盟関西支部の現状と未来を鑑み、私の願いを書きたいと思っております。

皆様既に御存知の如く、2011年春以降においては、日本学生航空連盟に対する朝日新聞社の後援が期待出来ず、関西支部は自立化していかなければなりません。しかし関西支部に属する各大学、各 OB 会の現状を見ますと、決して安心できる状況ではありません。斯く言う我々関学 OB 会も例外ではありません。

このような状況の今、必要な事は、これまで以上に各大学の壁を越えて、同じ「空の仲間」が協力してこの危機を克服することだと思います。各大学の同じ時代の空気を吸った同期の仲間同士で、OB 合宿を実施して旧交を暖める機会を持ちたいと思っています。このような具体的な行事を行うことにより、離れてしまった仲間の結束を強め、ひいては学生の援助につながることを期待しています。

最後に、同志社大学体育会航空部のこれからのますますの発展をお祈りして、筆を置きたいと思っております。



祝 辞

## 創部75周年おめでとうございます

— 故 北尾直敬教官の思い出 —

関西大学監督 松 浦 巧

1930年の学連創立当初、航空に向けて大いなる高まりを見せていた学生たちの情熱、並びに関係各方面の理解と協力は、1936年、貴部の前身である「同志社大学航空研究会」発足への原動力となつて、華々しく、前途洋々たるその船出をもたらし、貴部はその後も長く学生航空界におけるリーダーシップを掌握してこられました。

私自身はそのグライダー人生を振り返るとき、不慮の事故がもとで2005年に他界された元学連訓練部長の北尾直敬教官が遺された半世紀に及ぶ足跡とその面影を忘れることはできません。

教官は戦後GHQによる航空統制が解けて間もない1952年に奇しくも貴部に入部され、その技量はもとより、何よりも傑出した「人間力」でもって頭角をあらわしてこられたものと存じております。

想起こそせば私がまだ新人の頃、吉井川の夏合宿で宿舎当番をしていたときに、上下黒の背広姿、ポマードで髪を決め、“ただならぬ”趣を漂わせながら来訪されたのが、誰あろう、当時42才であられた(はずの…)教官との出会いでした。

今年55才を迎えるこの私より、当時一まわり以上もお若かったはずとは申せ、今後いくつ年を重ねようとも、追憶の彼方に浮かぶそのお姿に、畏敬の念を微塵も拭い去ることは叶わないでしょう。

私に限ったことではないですが、教官はどこへでもお連れ下さって、いみじくも常に人事の配慮を怠らず、多くの支援者(ファン)を地道に育ててこられたその「術」を生で学ぶ、無数のかけがえない機会を賜りました。

私が学生指導に向き合うとき、昨今ますます深刻さを増す彼らとの価値観や言葉のギャップの大きさには時に失望さえ禁じ得ませんが(彼らに責任こそないものの…)、これまで陰に日向にご支援を賜った、あろうことか、当の朝日新聞社自体の学連撤退をもって、高度に危惧すべき局面がまさに眼前の現実と化しました。

人生に危機はつきもの、さりとてこれを「窮すれば通ず」に転ずるために、真に必要なものとは何なのか。

「空飛ぶヨット」たるグライダーのオペレーションはまさに「ヒューマンファクター」の塊、更にはその周辺事情もまた「人」に支えられているのだと、天の声が聞こえてくるようです。

貴部の、大いなる次の四半世紀と共に、日本のグライダー界の将来がますます清栄でありますよう、衷心より願ってやみません。